

不安ではなく、信頼を育む社会へ

高谷 幸 (東京大学大学院人文社会系研究科 准教授)

3年前から、友人たちと「難民・移民フェス」を開催している。去る5月に第6回目を開催したところだ。きっかけは、ひよんなことだった。チリ出身で今は「仮放免」者(在留資格がなく収容対象だが、一時的に収容をとかれている立場の方)として暮らすAさんのエンパナダ(具入りパイ)を食べたことだ。Aさんは、以前は、シェフとしてレストランで働いていた。その腕が買われ、日本人の友人から一緒にお店を開かないかと提案された。Aさんはそれまで働いていたお店を辞め、開業準備を始めた。だが、東日本大震災が発生。その友人は放射能を避けて、海外移住を決めてしまったという。結果、Aさんは、お店を開くことができなくなった。しかし問題はそれだけにとどまらなかった。というのも、シェフの仕事と結びついていた在留資格も失ってしまったからだ。こうしてAさんは入管収容所に収容され、その後、仮放免となった。働くことは認められず、健康保険や生活保障からも排除された生活を送っている。

Aさんは、そうした中、生活を支えてくれる人たちに得意の料理を振る舞うようになった。私も友人と一緒に、Aさんの料理をいただく機会を得た。友人たちは、同じ頃、他の難民とも知り合っており、かれらの生活の大変さを実感していた。日本の難民認定手続きは厳しく、審査にも長い時間がかかり、その間に就労が認められない在留資格や仮放免になってしまうことが多い。私たちは、個々の難民や移民には、Aさんの料理のように、得意なことや好

きなことがあること、だが、在留資格のためにその力を発揮できないでいること、それが何よりもかれらを苦しめていることを、冬空の公園でエンパナダを食べながら話した。そのながれで、かれらが得意なことや好きなことを持ち寄って、チャリティのイベントを開いたら面白いのでは、という話になった。周囲にも声をかけ、とんとん拍子で話が進み、2022年6月に初のフェス開催に至った。当日は多くの人が参加してくれた。何よりも、料理や手芸品、音楽など思い思いの技を披露した難民や移民たちの満面の笑顔を見て胸が熱くなった。それは、様々な制約を課されたかれらの日常とは真逆の可能性を示しているように思えたからだ。

「移民」「難民」と聞くと、漠然とした不安を感じる人もいるかもしれない。昔も今もメディアは、かれらの犯罪、マナー違反を格好の標的にしてきたし、最近ではSNSのインフルエンサーも参入し、人びとの不安を煽っている。単純化を承知で言えば、移民らの権利を制限し、尊厳を蔑ろにする政策は、こうした日本社会の不安を糧にしてきた。しかし現実には、そうした「移民」「難民」も、一人ひとりが名前をもち、この地で暮らしている。かれらの多くは、私たち同様、自分や家族の人生を充実させ、他者や社会のために何かできると嬉しいと感じる人たちだ。そうしたかれらの姿や想いを知り、協働することが、不安ではなく信頼を育み、ひいては誰もが安心して暮らせる社会の形成につながるのではないだろうか。